

## 二つの『何処へ』について

—正宗白鳥のそれと石坂洋次郎のそれと—

辻 橋 三 郎

正宗白鳥の『何処へ』は、明治四十一年、『早稲田文学』の一月号から四月号まで連載された。石坂洋次郎の『何処へ』は、△胃瘻癰の巻▽△怪しき夜の巻▽△ホロモロンの巻▽は、昭和一四年、『大陸』の七月号から十一月号まで、△かつかうの巻▽は、『文芸春秋』昭和一五年一月号、△文学会の巻▽は、『日の出』昭和一七年一月号、△次郎長ぶしの巻▽△空晴れて△の題で△は、単行本『何処へ』初版本の出た段階で収載されたものである。△渡り鳥の巻▽は、敗戦後、昭和二年二月、八雲書院から出版された『何処へ』改訂版において付加されたものだ。その際、全編に推敲がほどこされたという（『石坂洋次郎作品集V「あとがき」』、新潮文庫『何処へ』平松幹夫執筆「解説」よりの孫引き）。

正宗白鳥は、自然主義文学のチャンピオンということになっている。当時の新聞は次のように報じている。

日露戦争後自己意識の盛んになった国民、殊に丁未思潮界に於て這般の自然主義が勃興し、四十年の文壇を蹂躪したるは、葉の自ら生ずる如く、極めて自然の結果であつたのである。

この記事の前には次のような表現がある。

日本に立<sup>た</sup>した丁未文壇の新自然主義は決して独、仏、露の口真似ではない。

そして更に、この記事の冒頭は次のようなものであった。

斯くあらゆる虚偽を排し、あらゆる偽善を排し、あらゆる便宜伝習的の道徳を排し、赤裸々に自己を暴<sup>は</sup>白し、直指直ちに現実の真に触れやうとした、霊と共に肉の力を主張した。（『同じく（二）』『国民新聞』明治四〇・一〇・二九、「同じく」とは、前日明治四〇・一〇・二八の「明治四十年の文壇（一）」に同じということ、辻橋注）

以上の引用記事は、明治の自然主義文学が、漸く顯著なものとなった「自己意識」、即ち個人主義思潮に招来されたものであり、しかも、日本という風土、歴史に胚胎した、独特固有なものであるということを行っているものである。白鳥の『何処へ』はその一つであったということになるのである。そして、その主人公菅沼健次は、「主義に酔へず、読書に酔へず、酒に酔へず、女に酔へず、己れの才智にも酔へぬ」男であった。「結婚」も「ノンセンス」（中略）開闢<sup>かいびやく</sup>以来億万人の人間の為古<sup>しやうこ</sup>したことだ、（中略）家庭の実例はもう見飽<sup>み</sup>きているといい、また、「革命軍に加つて爆烈弾に粉碎されようとも、山賊に組<sup>くみ</sup>して縛首<sup>しばりび</sup>の刑に合はうとも、結果が何であれ、名義が何であれ、自分を刺戟する最初の

者に身を投げて、長くても短かくても、或は即刻に倒れてしまつてもよい」と思っている、日本の自然主義の典型的な申し子であった。

さて、石坂洋次郎が『何処へ』を発表した昭和一四年の論壇においては、次のような言説が高く評価されていた。戦中戦後の知識青年層の心をとらえたあの『人生論ノート』（『文学界』昭和二三・六・一六・一〇）、新潮文庫版で中島健蔵はこの書物を、三木清の「結論であると同時に、三木清という人間への入口」と解説している）の著者、戦争末期左翼思想の持主として逮捕、敗戦後も釈放されず獄中死した、当時の最高の知識人三木清の文章である。

日本の使命と考へられる東亜協同体の建設は同時に世界史的意義を有するものである。そしてそれはまた必然に国内における新しい秩序の建設の問題を含んでゐる。日本は聖戦の使命貫徹のために主体的に整備されねばならず、この整備は国内改革なしには不可能であらう。

私は今ここでもはや東亜共同体の理論乃至我々の謂ふ協同主義の哲学を展開する余裕がない。私は今日の青年知識層がこの大いなる時代にふさわしい若さを取り戻す日を待望したのである。（『中央公論』昭和一四・五）

当時の最新鋭の思想家でさえ、石坂が『何処へ』を書き始めた時点——昭和一四年代を「大いなる時代」といい、「青年知識層」に時代に「ふさわしい若さを取り戻す」といつていたのであった。そして、石坂

の『何処へ』の主人公、中学教師（旧制）伊能琢磨は、「徴兵検査第二乙種向きな細長い胴体」の持主で、「頽廃美」をふりまく若い芸妓新太郎、下宿の主婦の妹「白痴美」を漂わせた伊保子などに関心をもたれては、それを悪く思わず、やがて担任をしていた生徒玉田金助の姉艶子に、惹きつけられていく青年であった。伊能は「日本の使命」や、「東亜協同体の世界史的意義」などはもちろん、日本が一五年戦争のさなかにあることも毛頭考えていない、「青年知識」人であった。しかも「知性」の敗北にうちのめされている人物であった。とすれば、石坂の『何処へ』の主人公は、時代に背を向けた、国策に歩調を揃えようとしないうち、極端ないい方をすれば、非国民的日本人であったということもできるのである。そして、それはそれでやはり時代の子であったとはいえず、うと思う。かくて二つの『何処へ』の主人公は、ともに歴史の流れを、前者は陽画で、後者は陰画という形で象徴しているといえることができるように考えられるが、どうであらうか。

## 二

二つの『何処へ』の登場人物と同じように、作者も亦、明治、昭和の知識人であったことはいふまでもない。正宗白鳥は、明治三四年六月、東京専門学校文学科（現早稲田大学）を卒業、石坂洋次郎は、大正一四年三月慶応義塾大学国文科を卒業している。わたしが大学を卒業した昭和一五年、全国の国公立大学の大学本科（旧制）の国文科（私立大学に多く設置されていた、高等師範部、専門部、その他公立の専門学校

（東京高師などを含む―現在すべて大学に昇格―を除く）卒業生は、合計二三五名であった（『国語国文学年鑑昭和十五年分』靖文社、昭一八・一一）。昭和四七年における国公立大学（新制）の学生数は、合計百五十二万九千六百六十三名である（『日本大学年鑑一九七三年版』（日本学術通信社、昭四八・四）。これらの数字をみると、いかに白鳥、石坂が最高の知識人であったかは喋々の要はあるまい（もっとも、大学卒業生がすべて知識人といえるかどうか、特に今日のように大量の大学卒業者の出る時点では疑問の点が多い）。この数字は目安としてあげていことだが、白鳥、石坂が真正正銘の知識人であることは、誰しも認めることであろう。社会におけるそれぞれの作者の在り方は、白鳥は、卒業後直ちに早稲田付属の出版部に奉職、『何処へ』発表時は読売新聞社員であった。一方、石坂は、卒業した大正一四年六月、青森県立弘前高等女学校（現弘前中央高校）に奉職、その後、秋田県立横手高等女学校（現横手城南高校）、県立横手中学校（現横手高校）に転じていたが、『若い人』が、ある右翼団体から、不敬罪・軍人誣告罪で告訴されたことがきっかけとなって、昭和十三年一月一〇日付で依願退職した。一四年間の教員生活であった。石坂が『何処へ』の稿を起したのは昭和一四年七月だが、その年の三月に上京していたから、文筆生活に入っ間もなくのことであったといえる。

結論から先にいえば、二人とも健全な常識人であったといつてよからうと思う。伊藤整は、有名な論文「逃亡奴隷と仮面紳士」（『新文学』昭一三・八）のなかで、日本の文士の性格を逃亡奴隷と規定した。そのなかで伊藤は、「二葉亭、藤村、鷗外、白樺系の諸家。ああ、外は虚無だ」

といって白鳥もその一人に考えているようだ。わたしはそうは思わない。これは中村光夫もいっていることだ。中村の言葉をあげよう。

抜けない現実家の一面を持ちながら、終生純潔な理想の権化であり得た人、文学にたいする不信の言葉を吐きつづけながら、それらの言葉をそのまま文学と化し得た人、神にたいしても、同じ性質のどんでん返しを信じた人、このような青春の劇は、暗い色調の作品で曖昧にしか語られてゐませんが、実際は力と輝きにみちてゐた筈です。

（『正宗白鳥 人と文学』筑摩書房版『現代文学大系第一二巻正宗白鳥集』解説、昭四一・一一）

この中村の白鳥評は、誠に慧眼というより他はない。伊藤整は、名著『日本文壇史 一二巻』（講談社、昭四六・八）において、『何処へ』を書いた前後のことを、詳しく叙述しているが、実務者として社会人としてひどくずばらな近松秋江と「よく一緒に女を買ひに行つた」とは書いていても、伊藤の綿密な調査に則った記述は、おのずから、秋江のずばらぶりを鮮明に描きあげること、白鳥の実直な執務ぶりを偲ばせるに十分なものがあるのだ。つまり、白鳥もまた、「二葉亭、藤村、鷗外、白樺系の諸家」とひとしく、質実な生活者であったといつていいと思うのである。見るがいい。明治四三年四月結婚以来、昭和三七年一〇月二八日死去するまで、あしかけ五三年にわたる円満な夫婦生活が、象徴的にそのことを物語っているとみてよからう。後藤亮『正宗白鳥 文学と生涯』（思潮社、昭四一・七）、兵藤正之助『正宗白鳥論』（勁草書房、昭四三・一二）、大岩鉞『正宗白鳥論』（五月書房、昭四六・九）田辺明雄

『評伝正宗白鳥』（学芸書林、昭五二・九）等の信頼のおける白鳥の評伝も、そのことを物語って余さない。即ち、「生涯つまらないつまらない」（内村剛介『妄執の作家たち』河出書房新社、昭五一・六）と作品のなかで語り続けつつ、「旧家の大百姓の大旦那」としての「日本人の土の霊」（内村言）を内心深く秘めつつ、明治三七年一月、『新小説』に処女作「寂寞」を発表以来、死没まで、実に足かけ五五年間、現役作家として営々として文筆活動を継続したのであった。白鳥の文筆活動が停止されたといえるのは、敗戦の前年、即ち昭和一九年だけで、その年のみ「徳田秋聲のことども」（『新潮』一月号）一文にとどまっているのである。

要するに白鳥は、生涯、時代と自己とを、つねに客観的、相対的に把握しつつ、退屈のうたをうたい続けたといった方が正しいのではないかとすれば、逃亡奴隷どころではなく、いっそ、日本的な仮面紳士と呼んだ方がいぐらいの人ではなかったろうか。つまり、本質的には健康な良識人であったといっても、過言にはなるまいと思う。

さて、石坂洋次郎の方に移ろう。教員生活に終止符をうたせる役割を果たした『若い人』（『三田文学』昭八・五―一二・一二、但し断続的）における、未熟な故に危く美しく見える、退廃ときらきらした才智とが無秩序に交織されているところの、江波恵子という女主人公は、当時砂をかむような荒涼とした学生生活をおくっていたわたしの心をうずかせた女性像であった。石坂自身、「窮した生活に置かれていまして、その生活からなんとか自分の気持を解放しようというので、破壊型の女の子を誕生させて、奔放な動きをさせてみた。自分を救うためでした。僕自身の家庭生活が乱れて、ゆがんで、危機に立ってしまったので、自分の窮した

気持をあの作品を書くことで、立ち直らせるということまでは考えていなかったけれども、うつぶんを晴らす――と、そういうような気持で書いておった」という風に、江波恵子像創造の経緯、『若い人』創作の意図を、対談者河盛好藏に語っている（河盛編『作家の素顔』駁々堂、昭四七・一〇）。それに対して、河盛は、環境が悪いために江波恵子の才能を伸ばし得なかったもので、「江波恵子がいまなお健康なのは彼女の健康さだ」といつている。この河盛言は正鵠を射たものといつてよからう。学生時代のわたしの感想は、青春の感傷から感受した恵子像であり、正しくは本質的に健康な女性像が描きあげられていたのであると思う。そのような、本質的に健康な、ユニークな女性像を創造し得たことは、石坂自身のなかに人間としての本質的な健康性が盤踞していたからといってよからうと思う。石坂自身は、「窮した生活」「僕自身の家庭生活が乱れて、ゆがんで、危機に立ってしまった」と語っているが、その文学的虚実の記録が、例の『麥死なず』（『文芸』昭一一・八）なのである。しかし、石坂の生活が乱れたのは、妻がマルキシズムの嵐にまきこまれ、若いマルキシストにうつつをぬかしてしまったからであった。石坂自身、当時マルキシズムを無上完璧の思想と思っていただけに、石坂家の混乱はただならぬものであったにちがいない。この『麥死なず』のなかで、石坂その人と思われる五十嵐という教員は、妻のアキにふりまわされつつも、教師としての役割については、それを立派に果たしていたという風に読んでよからうと思う。

アキにはその後間も無く三度目の自殺未遂があつたがこれは記すは

どのでもない。——世間も我が家も共産主義はあらかた終熄しゅうしつしたものであらう。(昭一一・六・二二)

これは『麥死なす』の結びである。このような表現で結ばれる小説を書いていても、県当局も、学校長も、町民もこれといってとりあげなかったということは、教諭石坂洋次郎の公的生活に、非難さるべきものなかったということになるのではなからうかと思われる。戦後最初の日本文学全集である、角川書店の『昭和文学全集21石坂洋次郎』(昭二八・九)にある自作年譜に洋次郎は次のように書いている。

昭和十二年(1937)三十七歳

(前略) 晝間の勤めをもちながら小説を書いてゐたので、もと／＼丈夫でない身体を一そう酷使しなければならなかった。ちよつと風邪でもひくと、二週間三週間と欠勤して学校に迷惑をかけた。そのころの中等学校は、勤務状態がわりにのんびりしてをつたから小説も書いていたので、いまのやうに教師の雑務が多くては、とても小説の勉強など出来ないであらう。また、学校当局や県の学務課が、私の小説勉強を見逃しておいてくれたことも、そのころの学校行政のやり方からみて、まづたく恵まれた異例のことだ。

わたしも、昭和一五年四月、九州の県立旧制中学校教師となり、県立の中等教育に携った経験がある。石坂のいうように、たしかにのんびりした一面はあったものの、『麥死なす』のような作品を発表してもこれ

というお咎めがなかったということは、彼自身の記す如く「まづたく恵まれた異例のこと」にちがひなかった。あまつさえ、翌一三年一月、前記したように右翼団体による『若い人』告発事件による依願退職時、従六位、高等官五等待遇になっていたということは、さらに一そう、わたしには「異例」に思える。そこからやはり、石坂洋次郎は教師としては、誠実熱心な勤務に終始していたと判断していいのではないかと思うのであるがどうであらうか。

要するに、前記したように白鳥も石坂もともに、本格的な良識の人、生活者であつたということになると思うのである。

### 三

次に、二人の『何処へ』という作品それ自体に目を転じてみたいと思う。

本格的良識の人、生活者である白鳥の人物論あるいは作家論において、多くの評家は『何処へ』の主人公、菅沼健次を、論旨展開の手がかりとしている。それらの発言を、二、三紹介しておく。中村光夫は漱石の『それから』(『朝日新聞』明四二・六・二七—一〇・一四)と「共通点をもつ」作品だとし、その主人公の「代助と健次の間」にも「いろいろ性格の共通点がある」、「ともにエリット意識の旺盛な若い独身の知識人であり、周囲の卑小な現実を軽蔑することによつて、自己の精神を保たうとする青年」だといっているが、まことに至言であらう。中村はさらに、代助も健次も「孤独な青年」とし、『何処へ』における白鳥の

「狙ひ」は、「主人公の観念的な孤独感が、実生活の倦怠のなかで風化して行く過程にあつた」というに至っては、その見事な分析に、ただ敬意を表するのみである。中村はさらに、

彼等の孤独はしたがって「寂しくて」もそれなりにかなり居心地のよい孤独なので、それを破つて人との交渉を恢復しようといふ要求は甚だ稀薄なのです。

これが明治四十年代の知識階級の青年の世代的特色であつたとすると、「何処へ」はまさに劇的要素の欠如によつて、これを巧まずに捕へてゐるし、「それから」は、小説といふ形にこだはりすぎて、彼等の快適なニル・アドミラリに劇を設定しようとして、不自然に終つてしまつた作品です。（以上の中村言の原文は「正宗白鳥（人と文学）」筑摩書房版『現代文学大系一二巻正宗白鳥集』昭四一・一一）

昭和五〇年四月、人々の注目を集めた『正宗白鳥―その底にあるもの―』（文芸春秋社）を刊行した山本健吉は早く、次のようにいつていた。

彼は世の中のことと自分の日常も、すべて意味を失つてしまひ、世界は美しいものでも楽しいものでもなくなり、生命に充ちた生涯にあこがれながら、主義にも、読書にも、酒にも、女にも、自分の才智にも酔へない自分を感じてゐる。言はば生活の意義と目標とを見失ひ、この世での完全な不必要性の烙印を我とわが身に押ししてしまつた。無気力と倦怠との権化が、菅沼健次なのである。なぜ彼はさうなつてし

まつたのか。作者は一言も説明しようとはしない。平野謙氏が、「天下りの余計者」と言ふ所以である。だが、作者があへて天下りの健次の余計者の生活を設定したのは、そのような性格に対して、当時、作者と読者とのあひだに、默契が成立してゐたからである。（『十二の肖像画』講談社、昭三八・一）

今度は、若手の評論家の評言を紹介しておこう。それは田辺明雄『評伝正宗白鳥』（学芸書林、昭五二・九）のなかにある言葉である。

『何処へ』は白鳥自身「私の初期の作品の中でも『何処へ』などは殊に嫌いである。下手な上に嫌味甚だしきものである」と確言している（下略）

これは二葉亭四迷訳のロシヤ文学、特にツルゲーネフの影響から発して、白鳥自身の内生活を根底に、当時の世相をもつきまぜて、自己とも他人ともつかぬ、一個の人間像を創出したのであった。

要するにこれは、白鳥の心の自画像であり、現実基礎をおきつつ、また具体的材をとりつつ、畢竟造りもので、また白鳥としてはそう書くのが自然であつたのである。（傍点田辺）

つまり、三人はそれぞれ、明治四〇年代の孤独な知識人、余計者の人間、白鳥の「心の自画像」であつたのである。三人の評家の言を

先ず第一に、白鳥、石坂ともに、『何処へ』の主人公は東京帝大出身ということになっている。ともに文科だが、白鳥の場合は哲学科であり、石坂の場合は英文科ということになっている。明治四〇年代と大正一〇年代の東京帝大文科に対する庶民、ならびに知識人の評価について推測し得る資料は、手元がない。しかし、わたしの大学卒業時、即ち昭和一五年三月、大学令による大学の国文学科のあった大学は、国私立（公立はない）あわせて一六大学にすぎない（東京女子大に大学部があつても、大学令によるものではなかった。前掲『国語国文学年鑑 昭和十五年分』）。とすれば、それより二〇余年前、三〇余年前の旧制東京帝大文科卒業生は、今日の学校、社会における東大信仰よりも、よりはなほだししいものがあつたにちがいない。しかし、今日の東大出身者が、すべて学識人格ともにすぐれているとは決していわれないと同様に、当時の旧制東京帝大文科卒業においてもそうであつたにちがいない。とはいつても、今日の新制東大卒も、当時の旧制東京帝大卒も、平均的に学力が高、いといふことができよう。したがつて、白鳥も石坂も、それぞれの『何処へ』において、主人公を東京帝大卒としたのは、まさに事実であると同時に、二人ともに、私立大学の出身者であることから、その背後にブラック・ユーモアがこめられていたと読んでいいのではないかと思う。何故かなれば、白鳥作品中の菅沼健次も、エリート意識の持主ではあつても、しかも、彼の場合、自他ともに客観化できる、ほんものに近い知性の持主ではあつても、最後の部分で、ひごろ健次が軽蔑していた

したがって、斜視的地点からの見方も、白鳥の深層意識の部分に潜在していたといえなくはないと、前述したようにわたしは考えるのである。すなわち、先に引用した織田の言葉は、作品自体の意味と、白鳥の暗い肉声とがダブっていたという風にも解釈されるのである。すると、すがめ、読め、読み方をすれば、白鳥の『何処へ』は、戯画的作品という理解も可能になってくるのである。そのことを、さらに、健次が東京帝大哲学科卒であることが、ある程度、裏づけているように思うのであるがどうであろうか。前途有為である筈の、明治時代の最高学府の深奥なる思索の学問である哲学科の学生の、人生に行き暮れている姿は、一つの力

リカチュアと読まれてもいいものがあるのではなからうか。

さて、この作品は、漱石の『明暗』同様、未完である。わたしは、かつて、『明暗』が未完だからといって、未完の作品として取扱うべきでない、書いたことがある。この『何処へ』へも、同様に考えたい。世上、『明暗』は、未完という前提にたって品隠されている場合が多いが、何故か、白鳥の『何処へ』に対しては、そのような考慮は払われていない。『明暗』は、初版本をはじめ、諸本（諸全集をふくむ）すべて「未完」と付記されており、しかも、汗牛充棟ただならぬ漱石研究書の大部分が、「未完」として処理しているのである。一方、単独書としての白鳥研究は、前記したように数少なく、それらとともに、その他、『何処へ』に言及している日本近代文学史の諸本の大部分が、「未完」としては処置していないのである。

しかし、わたしは『明暗』を未完とは考えないと同様に、白鳥の『何処へ』も、未完の作品とは思料しない態度をとることにする。その『何処へ』の結末の一行はこうである。

健次の足は行場所に迷った末、遂に千駄木へ向った。

千駄木とは、健次の恩師であり、健次の学力を高く評価し、その就職にも力を貸した桂田博士の家をさすことはいうまでもない。わたしは、桂田博士のモデルが坪内逍遙であることなど、一切顧慮の必要はないと思う。『何処へ』中の桂田博士はどこまでも、作品中の桂田博士である。健次はすでに在学中から、「博士夫妻の期待に背」き、「席順の高下を争」

わなかった。そのことは、卒業後の健次の博士への態度と対応する。健次は博士の書架の前に立って、「胴の長く足の短い博士の後姿を見て、その十年一日の如く迷ふことなく書物に耽溺する一生を羨ましく又不思議に思つ」たりしている（傍点辻橋）。そのような健次の内心も知らず、博士は次のようにいう。

この中の要点は、一々原書から直接に引照したのだから、自分でも確かだと信じてる。兎に角一応読んで下さい、君も必ず益する所があるに違ひない。（傍点辻橋）

こういった博士は、「三行小声で読み、頻りに首肯うなづいてゐる」のだが、この身振りは、意中の得意を示して余さない。それに対して、健次は、「博士の旧著を無理強ひに読まされる苦痛を予想して、暫らく無言である。」のである。このような状況の健次は、この時点で、桂田博士をもはや評価していない、それどころか、やや軽視の心すらぎざしていることを物語っているものと読んではなからうと思う。即ち、引用文にあるように、桂田博士をして「要点は一々原書から直接に引照したのだから」といわしめていることは、博士の所論が西欧の学者の「引照」を中核としたもので、創造性がないという趣旨がこめられているものと読んではなからうということである。西欧の学者の「引照」で事足りると思っている博士の、一種のドンキホーテ的性格を健次をして内心冷笑させているのである。そして、この健次の意識の背後に白鳥のさめた目と心とがあることを見落してはなるまい。それでは、桂田博士を軽視している



にもかかわらず、何故、健次は博士の家を訪問しているのか。それは、博士当人に面会することよりもその美しい夫人との面談の気分を楽しむためであったからである。『何処へ』本文の、次の表現をみるがいい。

健次が家族の如く屢々出入し初めたのは四五五年の昔だが、その頃は宝石の指環を光らせ、博士の妻君仲間では珍らしくはいやいで、来る人々を攫<sup>つかま</sup>へては、音楽の話や小説の話に夢中になり、健次などが小説の話から恋の話に移り、こそこそと無遠慮に女の品定めなどをすると、「いやね菅沼さん。」と云つて眉を顰<sup>しりぞ</sup>めながらも、心では悦<sup>よろこ</sup>しがつて、顔一杯に艶々しい色が漂ふ。健次は何時もこの快活な美人が教授の妻たるがために、花々しく交際社会へ出る機会のないのを遺憾としてゐた。(傍点白鳥)

そして妻君には寵児が一人欠くべからざる者になつてゐて、健次の目にはそれが誰れであるかよく分つてゐる。博士の殊に親しくしてゐる四五人の学生は、常にその家へ出入し、妻君の発起で、晚餐に招かれることもあるが、その中で殊に妻君の寵<sup>かたけな</sup>を辱<sup>はな</sup>うする者が一人ある。それが箕浦であることもあれば、健次自身であることもある。

そしてこの作品の時点では健次であつたのだ。この文章のあと、夫人は健次と次のようなやりとりをしているのである。

「だから私が云つてゐる通<sup>とほり</sup>、新奇に目醒<sup>めざま</sup>しい仕事をお始めなさい

な。男なら何でも出来るぢやありませんか、御自分の名を世間に歌はせようと、人の上に立つて自分の威光を見せようと、男にや世間が広いちやありませんか。」

「それで貴女は私が苦しんで仕事をして、世間に知られるのを御自分の慰みにしようといふんですか。」

「そりや楽みでさあね。これまで家の者のやうにしてるんだし、私が貴下が好きでならないんですもの。」

そのあと健次は、夫人に、「僕はね奥さん、誰れにも好かれたくも同情されたくもないんです、貴女がいくら同情して下すたつて、私と貴女とは霞を隔ててお話するんです。」と、ここでは、突き放してみせている。その健次の姿勢と、結末の千駄木行決断が対応しているのである。すなわち、結末では健次は、博士にではなく、夫人に会いに行こうとしていると読むべきであろうと思うのである。夫人との会話からかもし出される——年上の美しい女性との間に醸成される——雰<sup>ふん</sup>囲<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>を、楽しみに、健次は足<sup>あし</sup>を踏<sup>ふ</sup>み出<sup>で</sup>したと、わたしは読む訳なのである。健次の内部には、夫人との間を、特種な關係に發展させようという程の熱情は生まれていないことは、これまでの作品の展開が、はっきりと物語っているところであるから——。

ともあれ、女性とあるかかわりに赴<sup>おもむ</sup>こうというのである。という結末は、石坂の『何処へ』と同じであつた。

知性の人、伊能琢磨よ、どこへ行く——？

これが、石坂の『何処へ』の結末の一行である。そして、この石坂の『何処へ』でも伊能は、玉田金助の姉、艶子のもとに行くことが、ほぼ確実に予想されるようになっているのである。このことは偶然の一致で、石坂が白鳥の模倣をしたなどということは、絶対にあり得ないといっている。そのような言説がもちろんないことはいうまでもないが、明治ニヒリストの典型といわれていた、陰気な白鳥の作風を踏襲するような、石坂ではないからである。石坂は、東北出身なるが故に、葛西善蔵、太宰治まがいの暗いどろどろしたものを本来的に内蔵させていたとしても、それを否定抑圧する良識人であることは、『老いらくの記』（朝日新聞社、昭五二・四）その他の回想記の物語るところである。そして才氣溢れた文章を氾濫させる絢爛たる文体作風の持主なのである。とすれば、この偶然の一致は、白鳥の場合において、重視すべき事柄といった方がいいのかも知れない。ここにさきにあげた中村言を思い出していただきたい。中村は、白鳥の『何処へ』の主人公健次の孤独は「かなり居心地のよい孤独」といつていた。これは換言すれば、健次のニル・アドミラリは、いわば底の浅いもので、年上の美しい女性との対談のうちにたちのぼる気分のなかで解消される底（てい）のものであったと、極言すればいさそうなものではなかったかとも考えられてくるのである。その故にこそ、後年、白鳥が、この作品をひどく嫌悪するに至ったのではないかとも思われるのである。わたしは、さらに、白鳥にはこの戯画化された健次像を描いたこの作品に、少年時代から耽読した、江戸文学にある戯作文学のニュアンスが感じとられ、感覚的に嫌気がさしてきたからでは

ないかと思惟されるのであるがどうか。即ち、茶化したような、あるいは悪ふざけを試みている風な反省がされてきて、嫌気がさすようになったのではなからうかと思うのである。戯作という語の定義は、あとで諸家の説によつて検討することにする。

こういったからといって、わたしが白鳥文学を低く評価していると思われたりしてはたまらない。わたしは、白鳥が、藤村、漱石、鷗外に劣らぬ最高の文学者であり、かつわたしの最も愛好し、尊敬する一人であることを、ここではっきりと宣言しておくことにする。

#### 四

ここで、石坂の『何処へ』に筆を進めなくてはならぬ順序となってきたようである。わたしの管見した限りでは、石坂の『何処へ』を、真正面から論評した文章は、伊藤整のものした一文のみである（わたしの不勉強のせいであらうか）。伊藤文は『作家論』（筑摩書房、昭三六・一二）にあり、初出雑誌は不明である。新潮社版の伊藤整全集にも見当たらない。（『作家論』には、一九四一年八月十六年七月執筆となっている）。伊藤整はいう。

「何処へ」はたしかに「若い人」の脈を引いてゐて、石坂氏の仕事の正統的なものであるというとはいへる。

私は「何処へ」を石坂氏の正統的な作品と敢て見なし、そしてこの

作品を高く評価する。「若い人」などで、あの作品の面白さのうちの重要ならざる部分を形成してゐると思はれたところのものが、実は一番根本の面白さをなしてゐたのではないか、とも私は思つた。それほど私は「何処へ」に石坂氏のエッセンスのようなものを感じた。どうして、これは立派な本格小説だ、と私は作者に抗議したいのである。

この頃もつとも「十分に書かれてある」と思はれた作品は「何処へ」であつたと告白しなければならない。

石坂の『何処へ』を冷眼視した評文としては、かつて左傾したと自称していた、今は余り名前が記憶されていない俊英な評論家大井広介の一文がある。(大井は福岡県生まれ、本名麻生賀一郎という。ついこの前、自民党若手政治家として福岡県から代議士に当選した麻生某の一族であろうか。)大井は、先ず原文を引用する。「田舎に生れ、田舎で育ち、大学に入学中の数年間を都会で過しただけで、あとはまた十数年地方で生活してゐる私は、典型的な田舎者の氣質を背負つてゐる筈だつた。」そのあと、石坂の言葉を逆手にとって、次のような罵詔雑言に近い文章が続いている。

これらの先天的後天的性格は彼を『何処へ』の面白おかしい主任訪問や卑俗なアヤ子金助ビクニックの一條、鼻もちならぬ『或る人々』などの、極彩色の戯作にしたてあげる。それを「地味で温順しい生活を営んでゐる多くの人々」が最も喜んで呉れるといふ手前勝手な解釈

で、文学の「高い低い」を「御破算」しようといふのである。それこそ卑屈な戯作者根性といふものであらう。

これは、わたしにはいただけない石坂批判、『何処へ』へ批判である。このことは先に引用した伊藤言でも推察していただけることと思う。さて、石坂自身、この作品を、戯作と称しているのである。「私はこの戯作を誰よりもまず世間の大人達に捧げたいと思う。一日の事務や労働で硬直した頭脳が、この本を繙くことによつて自然に解きほぐされることがあれば、私の念願はそれで達せられるのである」(初版本序文、但しわたしは初版本を戦争で失つたので、これは、新潮文庫本の平松幹夫の「解説」からの孫引きである)。

ここで、戯作とは何ぞやということを、少し考えておきたいと思う。戯作が、近世中期の、洒落本、読本、黄表紙、寛政すぎでの滑稽本、人情本、合巻の総称であることは、各辞書の定義するところである。しかし、その性格に変遷のあつたことは、興津要の『転換期の文学——江戸から明治へ——』(昭三五・一一、早稲田大学出版部)や、水野稔の『黄表紙・洒落本の世界』(岩波新書、昭五一・一二)に委細詳述されているところである。興津言による戯作の定義を要約してみると、無思想性、かつ「つねになんらの創作衝動なく、題材と技巧との表面的な問題にかけくれ」たところにあるというのである。興津はまた、明治に入ってからも、戯作者たちの時代に対応したけなげな努力は続き、「激変する新時代に対応して、そのけなげな力をふりしぼつての方向模索もむなしくおわつていかねばならなかった。より本質的な内面の問題をもつた文

学的世代の登場によって江戸戯作は一応ピリオドをうった。」と書いている。興津は、戯作者たちからバトン・タッチの受け手が尾崎紅葉を筆頭とした、硯友社の人々であったと後述している。

水野稔は、洒落本の段階における、十返舎一九、式亭三馬の精進による戯作の変貌について次のように述べている。

洒落本そのものも、作者自ら通の呪縛から解放され、遊里という特殊地域の、うちという特殊知識依存のゆきかたから転じ、通人氣どりの狭い読者層より、さらに広汎な読者層に喜ばれるような作品が要求される。しゃれた遊里の手管魂胆のからくりよりも、もつと直接に人間の愛情、しかも市井一般男女のそれを描いたもの、うぶな青春の文学というようなものが求められる。(傍点辻橋)

この「うぶな青春の文学」というところに、あえて洒落本の特徴をみれば、石坂の『何処へ』は昭和の洒落本といえないこともないようにも解釈される。

これだけは、近世文学(江戸文学)に通曉した人でない限り、戯作なるものの理解を得られないと思うので煩を厭わず、『増補改訂版文芸用語の基礎知識』(長谷川泉、高橋新太郎編『国文学解釈と鑑賞』五月臨時増刊号、昭五四・五)からの抜粋を掲げておく。

前期戯作はまさしく知識階級の人々によって作られはじめたもので、本来雅の文芸に従事すべき人が俗文芸に手を染めた時の言訳めいた命名として「戯作」なる名称が生れた。これらはまったくの消閑の戯

技もあれば、知識人として社会に貢献すべく、俗耳に易い俗文芸に筆を染めて庶民教化に志したのもあった。それらが混交して実作がつづくうちに、次第に文章は世道人心の益無益とは無関係であるという理解が浸透しはじめ、表現の面白さに徹する意識が生じてくる。やがて安永、天明のかなり自由な空気を反映して「おかしき」を唯一無二の美意識として持つ戯作道が完成する。ひたすら「笑」のためのみ、考えうるあらゆる表現技巧を総動員して、「うがち」や「茶化し」の発想を「見立て」と称する技法を駆使しながら展開させていく。その技法が洗練すればするほど、それを理解する読者もまた限られてくる。前期戯作はするように仲間内の文芸としての性格を濃く持ち、その範囲内で成熟し完成した文芸となった。そこへ寛政の改革である。

従来の戯作者たちの大半が武士階級に属したこともあって、ここで作者層の大幅な転換が行なわれ、ここから後期戯作がはじまる。今度の担い手は大半が町人や極く下級の武士たちであり、しかもこの手合にとっては戯作者になることがすなわち知識人と認められるための道筋であった。内容や表現技法は前期戯作者の残した筋道が備わるとすれば要するに作者や読者の質の変化に伴う「笑」の質の変化があるのみである。そのうえで後期戯作の読者は大きく広がっていく。(執筆、中野三敏、傍点辻橋)

石坂は、はじめ、予科を経て仏文科に入っていたが、大正一〇年一月、うら子夫人と結婚、「間もなく肺炎から肋膜炎を病み、一時危篤の状態に陥」り、帰郷休学した(小田切進制作「年表」集英社版『日本文学

全集58『石坂洋次郎集』昭四一・六。翌年、単身上京、仏文科をやめて国文科に復学した。昭和五〇年五月刊の『わが半生の記』（新潮社）に

相変らず図書館で気ままに本を読み、教室の講義にはあまり出席しなかった。

と書いている。この相変らずとは、同書の数ページ前の、「慶応文科の予科時代、私は授業にはあまり出席せず、赤練瓦の図書館にこもって文学書を乱読した。」とあることをさしている。したがって、国文科卒業といっても、現代小説創作の栄養にはならぬ江戸期戯作の濫読の点では、白鳥に劣っていたのではないか。いわんや、戯作の定義など試みたことはなかったろう。その故に、石坂が「この戯作を」といっても、無思想性とか体制順応とかの性格をぬぎにした、「おかしみ」「茶化し」などを頻発させたところに「戯作」なる用語を使用したであろうと思うのである。その故に、『何処へ』は、伊藤整のいう如く、「正統的な作品」であり、「立派な本格小説」なのである。そのように評価されるものを、石坂は、「世間の大人達」の「一日の事務や労働で硬直した頭脳」を、「自然に解きほぐし」得たら、この創作発展の意図は達成されたいというのである。即ち、石坂は、『何処へ』を大人たちのエンターテインメントとして提供しているのだというのである。ここでわたしのいうエンターテインメントというのは大衆文学という意味ではない。桑原武夫のいう次のことに該当するということなのである。「われわれが文学の作品を読むということは、どういふことか」と、「それ

は、文学作品という一つの経験、つまり、『シンボルによる経験』であります。その経験——それは現実の世の中の経験ではありません。言葉を使って、技術によってまとめた経験ですが——その紙の上に書きあらわされた経験を読みとりながら、その文学作品の中に出てくる人物に、自分が同化する。一緒になるということです。』（『三笠新書』

『近代文学入門』昭二七・二）。

要するに、伊藤整が「私自身中学教師の経験」があり、インタレストを覚えたように、わたしも旧制中学の教員をした経験をもつために、主人公に十分に「同化」し、エンジョイできたのである。しかし、『何処へ』は、伊藤整やわたしなど、旧制中学の教師の経験がある者のみならず、同時代にはもちろん、今日でも、学校生活をおくった日本人の読者層に、登場人物との「同化」経験を享受させ得るエネルギーをもっていることを、わたしは断言できるように思うのである。石坂の『何処へ』をエンターテインメントといったのはそのような意味で世間一般で通俗小説、大衆小説という意味ではないと前記したのはこのような理由によるのである。

以下、わたしの『何処へ』との「同化」体験の告白を試みたいと思う。

## 五

石坂の『何処へ』を解く鍵となる文章として、中村光夫の「日本人の知性」（『中央公論』昭三三・四）があげられると思う。中村は、

つまり「知性」とは、「二つのもののあひだで選ぶ能力」といふことになり、そこから「推理し、知覚し、理解する能力」といふ意味がでてくる（下略）

「知性」とは、何も知識階級といった特定の人間だけが持つてゐる特権的な能力でなく、人間が生きたために用ゐなくてはならない一つの機能であり、かういふいかめしい訳語を使ふより、むしろ「あたま」とでもしたら、原語の意味をよくつた、へたでせう。

知性に関していへば、その特質はまづ既成の知識の収集、堆積をもつて、知性の生きたはたらきに換へた点にあります。

知識が知識階級の内面で、その生きた機能をはなれて孤立してゐるやうに、知識階級の存在や彼等の思考は社会生活に有機的に組みこまれず、ある遊離したものになつてゐたので、この遊離が知識階級を苦しめる代りに、彼等の伝来の特権意識を満足させたところに、明治時代の知識階級の特権的な性格があつたと思はれます。

要するにすぐれた知能にめぐまれて、これを懸命に働かせながら、その持主の人間が少しも幸福にならないのです。

知性は外界の正確な表象をあたへる重大な役割をここに果すのですが、知性をこのやうに外面にはたらかすことだけで人間の幸福は成就

するかといふと、さうはいかないのです。知性は同時に人間の内面も照らす光であり、僕等の情熱を統御し、行動を批判します。この内面にむけられた知性、すなはち意識が、最後の価値の決定者であると考えれば、僕等の幸福はたんに外界との調和だけではもたらされません。自分自身との調和が、自分の考へで自分をもつとも高く価値し得ることが幸福の最後の条件です。

知性がこのやうに内面に働き、徳の役割を果たすには、それが生命の触角としての機能を保つてゐなければならぬので、既成の知識をそのまま記憶する作業の反復は、やがてかうした知性の生命を枯らさずにはおかぬのです。

彼等は当然社会的優位を占めますが、自己の内面について何等の知覚も愛情もなく、自分のために生きる習慣を喪つてゐるために、つねに外界にだけ眼を向けて、何かのために生きてをり、どんな社会的地位を得ても、虚栄心以外に何も満足しません。（傍点、すべて辻橋）

以上、抜粋しただけでも、この戦後の中村文は、戦中の石坂の『何処へ』を發想の原点、あるいは、同作品を抽象的理論化したものといえさうにさえ思われるのである。ということは、石坂『何処へ』が『若い人』において、軍部に圧力を加えられたことによつて、あえて石坂の警戒心から、歴史的寡黙気を捨象し、それがこの作品に、ある永遠性を与えているように理解されるのであるがどうであらうか（風俗の点、今日との違和感のあることはあらそえないが）。

さて、石坂の『何処へ』は、奥羽本線のA駅のある町の人々と、その中学校（旧制）の先生と生徒たちとのさまざまな人間図絵なのである。人間関係を整理して言えば、学校内の知性派と土着派（反知性派）、知性派教師と町の人々（土着派）、知性派教師と町の女たち、以上の三つの関係の錯綜がこの作品の大きな骨組みなのである。それが、冒頭に記したように七つの巻から成立しているのである。伊藤整は前掲評論のなかで、「かつこうの巻」が「面白く読まれるのに較べて」、「次郎長ぶしの巻」と「文学会の巻」が「厭らし」といつているのには同感である。「かつこうの巻」が、この作品のクライマックスをなしているといっても、過言ではなからう。（以下、本文の引用も行うが、旧仮名による初版本が入手不可能なので、やむを得ず、新仮名づかいによった新潮文庫本によることにする）。

「胃遡攀の巻」に、A駅の駅前広場の描写があり、それで、この作品の一つの背景が象徴されている。

駅前の広場はどろどろにこねかえされて、所々に水溜りが出来ており、まわりには宿屋や飲食店や運送店など、どれも押し潰されたように歪んだ低い建物が、疎らに六・七軒並んでいた。家と家との隙間からは、泥水を湛えた田圃が覗かれた。さまざまの雨具を身につけて、水溜りをよけながら広場を徘徊している人々の姿が、一層物色しい印象を添えていた。

その次に、そのように駅前広場に立った、『何処へ』の主人公「伊能琢磨」については、こう記されている。

品質は上等でないまでも、うす鼠の格子縞の洋服をびったり着こなした伊能の肉体は、雲に濡れそぼられたA町の瞥見に対して、本能的な嫌悪を感じた。その肉体の中には、彼の洋服と同じように、少しばかりくたびれた、それゆえまたかえって粹に見える都会風の教養が、青い水のように湛えられていたのである。

ここには、A駅頭情景と、伊能琢磨の風采、ならびに、彼の内部に惹起されたずれた感じ、見事に造型されているといつてよからう。そのずれが、この作品の主調低音となって、結末まで続くのである。

この巻では、伊能を迎えに出た、中学校の事務書記——学校内の土着派の一人といつていい——と、やはり町の土着派の一人、木山医師、それにこの後のストオリイ展開に大きな役割を果たす「お狭で美人で頭のいい」、「肝っ玉の据った」才太郎という姐さん芸妓と、「首白粉を濃く塗ってゐるので、小麦色に灼けた顔だけが、別に貼つけたもののように体から脱け出して見え、眼が褐色を帯びて強く光り、唇が始終何か言いたげに盛り上がった恰好をしており、少し出額で、しかもそこだけが特別に白い滑らかな艶を放って君臨している感じが、ピリッとして、しかもエロティックな印象を与える」新太郎という若い芸妓とが、先ず紹介されている。

伊能は下宿に着いた。下宿からの眺めはこうだった。

障子を開けると、畑を作ってある広い裏庭が眼の下に見え、垣根の外は水田が展<sup>ひら</sup>げて、ずっと向こうの丘の所までなだらかな勾配<sup>こうはい</sup>をなして続いていた。大きな建物も山もないので空がばかにだだっ広く見えた。静かでいい景色だが、都会に住み慣れた伊能には、落莫とした冷たい感じがした。疲れていたのも、伊能は張り出し縁に両足を載せて煙草を吸いながら、やっと薄陽<sup>うすひ</sup>が洩れ出した大空の雲の流れを見守っていた。

このような、静かな美しい田園風景もまた、この作品の一つの背景であった。要するに、自然と人為とからなる明暗二つの背景が、この作品の背景であったといつてよからう。下宿は、井上という人の家で、主婦には伊保子という妹がいた。伊保子も、この作品を点綴する女性の一人だが、先ず、次のように紹介されている。

身体しんたいのつくりはゆっくりして大きい、眼や鼻や、顔の造作の一つ一つは、仮にくつつけたもののよう、淡い、散漫な感じを与え、色が白く肌はだが滑らかなので、そういう顔のつくりが、かえって触れやすく親しみやすいポーッとした美しさを漂わせているところもないではなかった。

「怪しき夜の巻」では、伊能は、清水校長宅に挨拶に出かけた。「小柄な、割に品のいい顔立」の校長は、「この町は万事封建風風の多い旧

式な所だが、女はなかなか美人が多い所」といい、学校については、前校長の派閥、わたしのいう土着派が「相当な勢力を張っている」、「この連中は怪しげな私立学校ぐらゐを出て」いると先ず校内の説明を始めた。そして「君のような」「わしもそうだが官立大学出がいちばん優秀だ」と自画自賛した。「伊能は、校長が自称するインテリという資格には多分に疑惑を抱」く。まさしく、中村のいう、「既成の知識をそのまま記憶する作業」のみを「反復」し、「知性の生命を枯ら」した人間なのであった。そのことは、ページを追っていくごとに、明瞭になっていく。清水校長は、妻君が娘の女子大入學に同伴して上京中だったので、生徒の目を憚りつつ伊能を伴い、「ひさご屋」に行った。清水は才太郎の手相をみて、思いを告げようとするが、彼女はとぼけて反応しない。そこへ、新太郎が、中学の同窓会長、花山をつれてきた。花山は「県会副議長」かつ「地主で大金持」で、「豪快に笑」う男であった。清水はあわてて押し入れへかくれ、新太郎の晴着にゲロを吐いた。才太郎は、「花山会長の手首をつかんで」「二階へ導いた。花山は、二階に鷹揚<sup>おうよう</sup>につれて行かれる前に、自己紹介した伊能に、清水批判をする。

小才子でね、ちょっと仕え辛い<sup>づらい</sup>かも知れないな。根は胆<sup>きも</sup>っ玉の小さいお人好しなんだが、人の前で無暗<sup>むやう</sup>に威張りたがってね。地方の人氣があんまり芳<sup>かんば</sup>しくないんで困るんだ。僕は奴<sup>やつ</sup>さんがここへ赴任する時、県の学務課から頼まれたんで、始終味方にまわってあるんだが、どうも応援のし甲斐<sup>がい</sup>がない人間で弱るんだ。



こうなれば、知性派清水の正体はもちろん、その清水と、土着派花山との勝負は、もう決まっているようなものである。その清水の知性の何たるかは、翌日、伊能の就任式の挨拶でも、そのぎざぎざ、浅はかさが、どきついばかりに描きこまれている。官立大学卒業生清水校長が、小人であり、その蓄積されている知識量が、少しも、中村のいう本当の知性として機能しないことは、次の「ホロモロンの巻」でも、さらに一層、てきびしく描写されていて、それはぶざまな有様といっている程である。それよりも、惨憺たる体たらくを露呈しているのは、清水の系列に属する筈の英語科主任教師田島である。田島は、清水以上の怪知性派であった。石黒書記を手足にした高利貸であり、床の間に贋作と知りつつ、大観という署名のある山水画に、「正価八百円也」と記した「赤札」をつけた、はずしたりするしろものだった。その言い草が面白い。

やあ、これは目障りなものをお目にかけて……。こないだ買ったばかりだから、こんなものをくつつけておいて失礼……

こう言って、「赤札を引っぱがした」が、このしぐさは、新しい来客ごとに、田島の繰り返す行事であることは、あとで伊能に石黒がばらしたことだった。その彼が、伊能の「英文学の御専攻は何でございしました？」という質問に、「沙翁レニイグスレーでしたよ。彼は英文学界の最高偉人ですかな。『ロメオとジュリエット』など素晴らしいじゃありませんか……」と、さらっと答えるのである。こうなれば、無邪気という形容が相応わしい程である。この人間像は、中村の言う「つねに外界にだけ眼を向け

て、何かのために生きてをり、どんな社会的地位を得ても、虚栄心以外に何も満足しません」という解説通りの人間といつてよからう。清水校長もまた、同然であることはいうまでもない。

肝心の主人公伊能の知性度はどうであったか。下宿に到着した日、入浴時の彼を、作者は次のように説明しているのであった。

現に伊能の知性をもつてしても、対象が同性である場合は、垢と教養の見分けがすぐつくけれども、相手がうら若い女性だと、全然判断に自信がもてなくなり、それどころかダンサーでも女給でも扮飾ふんしきの美しい女には何とかして近代的教養を発見したくって、むずむずしてゐる実状だった……。

また、校長宅を訪問した夜、校長とともに芸妓才太郎の家に行った帰り、芸妓新太郎と、町裏の稲荷いなり様の小暗い境内を通りぬけた。その時新太郎は、突如、「拝殿前の明るい円形」で、踊り出したのだ。

着物の裾を腰紐こしひもに挟み、水色の下着をふんだんに現わし、手も足もいっぱいに拵かちげ、自由濶達かちうちに舞っているのだが、顔にも振りにも凛々りんりんと鳴り出しそうな真剣な気魄きぼくが籠こもっていた。顔を燈籠の光りに仰向けてキマった時の凸額おでこの白い滑らかな美しさなどには、神秘的なものさえ感じられた。時々、足を踏み下ろすごとに、小砂利がザクザクと鳴った。

伊能は、足が崩れそうに軽くなるのを、手洗い所の柱に捲きつけて

辛うじて身を支え、固唾を呑んで、新太郎の踊に見惚れていた。

知性派伊能も女には、弱いという訳だ。のみならず、伊能は、就任の挨拶に際して、「私は、ただいま、校長先生より、御紹介にあずかりました伊能琢磨であります……」「私は浅学菲才、なんにも知らないものでありますから、今後よろしくお願いいたします……」そしてあげくの果てには、「国道を、町の屠殺所に曳かれていく大きな斑牛」の「大きな弾丸が飛ぶような唸り声」を耳にするや、「諸君！アレハ牛デアリマス！」といって、「後ろに退い」てしまったのだった。しょっぱなから散々である。さらに実際に教壇にたつてみて、伊能は一層の自己嫌惡にとらわれてしまったのだった。以下の引用文は、『何処へ』のなかで、最高のできばえである、「かっこうの巻」からのものである。

彼の予想では、自分がひとたび教壇に立つて、つと眼を閉じてまた開けば、日ごろ頭の中に濃くくすぶっている知性の蘊氣が、豊かな觀念に裏づけられた美しい言葉となつて、泉のように滾々と口許から溢れ出し、それが稚い純な生徒たちの心をプラトンの世界に牽き入れることが出来るはずだった。（彼は生徒の大部分がプラトンというのにはインクの名前だと思ひ込んでゐることを知らなかったのである。）ところが、實際教壇に立つてみると、日頃頭の中にモヤモヤと低迷していた知性の霧が、あとかたもなく蒸発してしまい、自分の身体が空洞の大木に化したようなたよりない気がしてくるのだった。そして、榮えない平凡な言葉が、兎糞のようにポツリポツリと口から洩れるばかり

りであった。彼は狼狽して、救いを呼ぶように、長い柔らかな髪を忙しく掻き上げ掻き上げたが、なにほどの効果があるものでもなかった。

生徒は退屈してざわめき始めた。彼の授業はいつも騒々しいものになった。

ここにみられる伊能の惨めな状態は、前掲した中村の次の言葉の結果であつた。「知性に関していへば、その特質はまづ既成の知識の収集、堆積をもつて、知性の生きたはたらきに換へた点にあります。」即ち、伊能の知性は、単なる「既成の知識の収集、堆積」にとどまつており、授業という場において生きて働かなかつたのである。その結果、中村言のように、「これを懸命に働かせながら、その持主の人間」伊能が「少しも幸福にならな」かつたのである。

## 六

「かっこうの巻」の次の場面の点検によつて、『何処へ』の構造の本質はほぼ解明されるのである。この巻の主要場面、「北国」に春が訪れて、「ある春の土曜日の放課後」開催された「職員會議」の席上である。清水校長が、「諸君の努力」によつて、「最近の学校における諸般の狀態」が向上したが、それも一つに「諸君が私の教育方針」に則つて「生徒の訓育」「校風の改善」に「格段の努力」をされた結果と信じてと手前味噌を述べる。それに対して石黒が頓珍漢な賛同の意を述べた。その

時伊能の隣席の、「大学の先輩で数学の教師」の矢吹が落書をしていた。見ると、「いっぱい円やら線やらを殴り書きした紙の余白に、『自画自讃——自画自讃——自画自讃』と同じ文句をいくつも書き流していた」のである。矢吹については後述する。

当日の会議の主なテーマは、最近、授業時間に「騒々しい組がチョイチョイあるようで、隣の教室でずい分迷惑」しているということについての対策であった。最初の発言者は剣道部の野口教師だった。それに「職員中の最古参」「反校長派の中心人物として、学校の内外に重きをなしていた」国語主任の坂本教師が同感の意志表明を行った。清水校長はこと意外と反応を示すと、すかさず坂本古参は、校長は特別と反撥する、そこで清水は「初耳」と対応し、田島に意見を求めた。田島は校長見解をうけて、その「期待に添った」「アルミニウムの釣銭が出そうな名答弁」をした。そのあと、

えーエ、御参考までに申し上げますが、私は平素生徒を訓育するに当りまして、カーネギーの『努力は富なり』というモットーを掲げさせて、やっております。その文句を額にして受持教室にかけさせておきますが、生徒は割によくその趣旨を呑み込んで努めておるように思いますが……」

といった。「伊能は喉が塞がれたようになり」「活路を求」めて「矢吹の落書きを覗」くと「無○厚顔」と書かれていた。「伊能は横合いから」「○の所」に「恥」と書くと、矢吹は「赤くなつて、落書きの紙を丸めて

ポケットにつつこんだ」(傍点辻橋) 矢吹は、含羞の人であったのである。ここに、矢吹こそ本当の知性の人であることの片鱗が示されているのだ。矢吹については、更にあとで触れることにする。そこで、野口教師が立ち上って発言した。

「田島先生のように高尚なことを言われては我々が困ります。田島さんのようにカーネギー翁と御親戚(しんせき)なんかだと、生徒はよく言うことをきくでしょうが、我々のような凡骨は、絶えず口喧しく怒鳴っておらなければ生徒を治めていくことができないのであります。臭い物に蓋をして、学校が良くなったと言っているんでは、いつまでたっても実績が上がらないと思います。職員はいわば内輪同士でありますから、お互にザックバランなところをさらけ出して協力してやっていかなければ駄目だと思います。……せっかく静かな授業でも生徒が居眠りしておったんではなんにもなりませんからな」

カーネギーさんは、『眠りは富なり』とは教えなかったでしょうから。生徒は貴方には心服していますよ。

何という土着派教師の知性派教師へのわざびの利いた、風刺であろう。清水校長、田島英語科主任の、お寒い知性は、もはや完全に暴露されたといっている。その校長は、「要するにみんなが足並を揃えていくことですか」と一致協力を要請した。その時、不意に伊能が起立した。石坂はそのあと、「遂に立った知性の人、伊能琢磨！」という揶揄的な

言辞を挿入しているのである。石坂が描きあげようとしている伊能像——それは石坂自身が背後に読みとられる人間像だが——の一端が吐露されたものであり、これは、結末の「知性の人、伊能琢磨よ、どこへ行く——？」の句と、遠く相呼応しているものと読んでよからう。さて伊能の言葉を聞こう。

私はさきほどから問題になっております生徒に甘い側の職員の一でありますが、(中略)坂本先生や野口先生から職員は足並み揃えて生徒の訓育に当らなければいけないとの御意見がありました。そこで問題なのは、どんなふうに足並み揃えるかということですが、力で生徒を抑えつけるか、それとも正しい道理で生徒を導いていくか、いずれその二つであろうと思います。これが一致しないとかお互い実困るのであります。ある先生は生徒を殴る、ある先生は信念として殴ることをしない。とすると、結果において、殴られる生徒の心が荒んで、殴らない先生の時間には緊張を欠くというようになりま

す。殴ることが教育の手段として許されるか許されないか、これについて校長先生のハッキリした御指示を仰ぎたいと思うのです。

このような伊能の「形式的な絶対論」は、一瞬、沈黙をもたらした。そのあと、校長は、「迷惑そうな微笑を滲ませ、」一応の理解を示し、その返答を「第一……僕にはこの生徒が殴らにゃならんほど野蠻だとは信じられないがねえ……」と結んだ。即座に田島主任は同感した。答えを求められた野口は、「殴りません。強く摩擦する程度です」といい、

坂本は強い調子で「私は殴ります」といった。その後、陰湿な問答が重ねられたのち、清水は、どちらにも「言い分」があるから、議論はよそう、校長としては原則として殴ることは許可しないが、「止むを得ない時」は「強く摩擦する程度にしておく」、そして時間もたったからと、閉会を宣言した。伊能は「裏切られたような気がした。」「その佻しさが、彼の理論の冷たい空隙から湧いて出るものであること」を「認めようとはしなかった。」「ある種のインテリの特徴はひどく鈍感なことであるが、伊能もその例に洩れない一人であった」のである。その帰途、伊能は矢吹と一緒だった。矢吹は、会議中の落書きについて、自分は「統計を読んだり作ったりするのが大好き」だから、それを試みているのだといい、最後に彼はこういった。「数字には性格があるんだよ」といった。伊能は「そうした心を美しいと思」いつつ、今日の自分の発言についての感想を求めた。矢吹の答はこうだった。

——あれはねえ、僕は君が愛情が足りないんじゃないかと思った。人と人との関係では、殴ることが愛情で、殴らないことが冷淡である場合がずい分多いものだ。僕は中学を卒業してからよく殴った先生のことを懐かしく思い出したよ。しかし人間同士のことは僕にはよく分らない。僕は日曜ごとに魚を釣りにいく。しかし魚に害を与えない君より、魚を殺す僕のほうがずっと魚を愛しているからね。……君は利口だが心の冷たい人だと思う。そのことは別段悪いことじゃないけどね。……知性の敗北か……

こうして、矢吹こそ本当の知性の人だということがはっきりと読者に伝達されているのである。つまり、前掲中村言のなかの

つまり「知性」とは、「二つのもののあひだを選ぶ能力」といふことになり、そこから「推理し、知覚し、理解する能力」という意味がでてくる（下略）

という見解そのままの能力の持主が矢吹ということになってくるのである。この矢吹もまた石坂の分身であり、わたしは、石坂という作家は、伊能と矢吹とを合せ鏡にすることで把握できる作家ということになるのではないかと思うのである。つまり、石坂という作家は、立派な知性人だったといつてよからうと思うのである。

さて、翌々日、月曜日の朝、伊能が登校してみると、彼の担任の生徒、玉田金助が土曜日の放課後、女学生と相乗りしていたという事件が報告された。その金助は、つい先日、弁当を盗み食いたという容疑で取調べられたばかりだった。その時、野口の一喝で、犯行を自白した。その時、野口は、「教務主任に調査不十分な報告をしてしまった伊能の立場を考えて」、その件については金助をふくめて、「有耶無耶に葬ってくれた」のだった。伊能は、今度も野口と二人で金助の訊問に当った。野口と金助との万才のような軽妙な会話の中には、しみじみと心があたためられるような人間の感情の交流が読みとられる。しかも、それは「歌舞伎狂言の名ゼリフのやりとりでも聞くよう」な魅力に富んだものだった。石坂のユニークな文才に改めて感動させられるところである。さ

て、金助が相乗りした女性は、親戚の長井アヤ子という高等女学校（旧制）の五年生だった（玉田金助は旧制中学三年生）。とり調べの途中、野口は自分の好きな鮎パンを小使いに買いに走らせた。会話は、アヤ子を中心にして、ますます佳境に入っていた。そこへ、「鮎パンの袋」をもってきた小使が、「野口に電話がかかっていると告げた。」野口は、「生れたかな」と呟き、伊能に「かみさんが臨月でしてね」と言い、さらに金助には「待つてろよ」といって宿直室から出ていった。「二人きりになると、伊能の胸には、金助に対する肉親的な愛情がほのぼのと湧いてきた。」そして、空腹を訴える金助を、もう直ぐすむからとだめて便所に行った。帰ってくると、「いま別れたばかりの野口が、ただならぬ様子で走って来た。」金助が鮎パン三つを食って逃げたというのである。二人は、金助の後ろ姿を追って裏山に登った。金助は大きな高野槇に登っていった。

生徒が退けてしまった裏山は森閑として、夕陽を浴びた樹々の姿が夢みるように美しかった。所々で郭公鳥が啼いていた。ひろい芝地には陽炎が淡く浮き、耳がキーンと鳴るような深い静寂があたりに立ちこめていた。

『若い人』でお馴染の裏山である。さて、野口は、柔道二段の佐伯熊吉に、木に登って金助を「逮捕」してこいといった。「間もなく葉のしげみの中に隠れた」佐伯は、実は、金助から「つぐみの雛」（傍点原文）を握らされておりてきていながら、「金助はおらが踏めば、折れ

そんな細い枝さ逃げて行ってもつかまらねえ。まるで猿みたいな奴だす……」と報告した。野口は「長期戦でいく」と仰向けに寝ころがり、伊能に「男の子が生れると予想して」名前を選んでほしいといった。そのあと、野口は「淡雪の降りくる天の暗からず」以下、四つの自作の句を披露した。「すると夕陽の残照を浴びてひっそりと静まりかえっていた梢のしげみから、半分泣いているような唄声がホロホロと降って来た」のである。その歌は、「私や十六満州娘／春よ三月雪解けに／迎春花が咲いたなら／お嫁に行きます隣村／王さん待つて頂戴ネ……」という、「かつこうの巻」の発表された昭和十五年一月号の発売された時点で流行していた、石松秋二作詞、鈴木哲夫作曲の「満州娘」(昭一三、ティック)という歌謡曲であった。

それに和して野口が唄い、伊能も低い声で唄い出していた。

——伊能は藁のように温かい人の心を感じた。

ここで、「かつこうの巻」は終わっているのである。金助が歌い、野口が歌い、伊能が歌う。合唱である。人間の感情の交流以外の何ものでもない。伊能が、「藁のように温かい人の心を感じた」のは誰か。それは野口に対してである。ここで「藁のように温かい人の心」の「藁のように」という修飾語について、一寸考えておきたい。藁とは、「稲・麦の茎をほしたものと」岩波版『国語辞典』に解説してある。とすると、石坂の表現中の藁は稲・麦の生産されるところを象徴しており、とりもなをさずそれは土の匂いを意味しているものと解釈してよからう。つま

り、「藁のように温かい人の心」とは「土着の人の温かい心」ということになると思うのである。即ち、このことは、伊能は野口のなかに、前掲の中村光夫の言葉の指摘するものを発見したということになると思うのである。

「知性」とは、何も知識階級といった特定の人間だけが持つてゐる特権的な能力でなく、人間が生きるために用ゐなくてはならない一つの機能であり、かういふいかめしい訳語を使うより、むしろ「あたま」とでもしたら、原語の意味をよくつたへたでせう。

要するに、伊能が野口のなかに「あたま」を発見したのである。つまり、知性派の土着派への敬礼で「かつこうの巻」は終わっているのである。「あたま」の人野口に、「知性」の人伊能は敗北したのである。そして、そのあとの「次郎長ぶしの巻」も「文学会の巻」も、清水校長はじめ知性派惨敗の歴史である。同窓会長花山にいたっては、「あたま」の人として、知性の人清水校長の敗残の姿に、救いの手すらさしのべているのである。この知性派の土着派への敗北という経緯には、「日本への回帰」という当時の時代思潮の一つの反映を読みとって差支えないと思う。意識的に歴史とのかかわりを避けた石坂も、意識下においては歴史の翳をうけとめていたといつてよからうと思う。「渡り鳥の巻」では、知性の人伊能は、金助の家に、家庭訪問に行き、金助の祖母と姉艶子とに会うのである。その前に、伊能は、金助から姉を「嫁にもらつてください」と懇請されていた。やがて、伊能は艶子のなかに「あたま」を

発見したのだった。

二人が草をむやみに采りながら、ぎこちない会話をつづけているとき、少し離れた薄の叢の中では、金助が密生した茎を掻きわけて顔を覗かせ、こちらの様子を窺っていた。(中略) 薄の間から見ていると、背中のヒョロ長い伊能と、それに寄りそうようにしている艶子の丸く肉づいた肩が、いつまでも動かずに並んでおり、彼らの頭上には赤トンボが群れ、もっと高いところには、青い空が円天井のように壮麗な弧を描いてかかっていた。その中で、髪をしばった艶子の手拭いの白い色が、世にも清らかな美しいものに思われた。

ここで、結末の、「知性の人、伊能琢磨よ、どこへ行く——？」という疑問への解答が暗示されているとみてよからう。即ち、敗北した知性の人伊能は、「あたま」の女、玉田艶子のところに行くというしかけになっていると読んでよからうと思う。但し、「渡り鳥の巻」の執筆が戦後であるというところから、太平洋戦争勃発前の時点では、知性の人伊能の行方はなお、曖昧模糊たる彼方にあったと考えてよからうと思う。戦中最後の執筆たる「次郎長の巻」が発表されたのは昭和十七年一月、執筆はそれよりさかのぼるであろうから、太平洋戦争が勃発する前後、戦時景気に湧いていた時代であったと思う。その故にこそ、その結末の一行が「——ああ歓楽の夜は更けていく。」ということになったのであると思う。ともあれ、太平洋戦争に突入していなくとも、一五年戦争のさなか、即ち、「暗い谷間」の時代であったから、知性軽視の時代思潮

は、石坂の上に重くのしかかっていたらうと思う。したがって、「次郎長ぶしの巻」における伊能をはじめ、知性の人びとの混沌低迷は、石坂自身の内部の状況の、戯画化拡大されたものであったとも解釈してよからうと思う。

## 七

要するに、白鳥の『何処へ』も、石坂の『何処へ』へも、ともに、明治と昭和との知識人の彷徨——知性の彷徨のすがたの見事な具象化であったと読んでいいのではないかと思う。

そして、二作ともに、女性のところに赴くであろうことを暗示させる結末となっているところに、明治末年と、昭和一〇年前後の知性なるものが、「内面に働き、徳の役割を果すには、それが生命として生命の触覚としての機能」(前掲中村言)を発揮するにいたっていなかったことを証明するものとみてよからうと思う。もっとも、石坂『何処へ』の主人公伊能の胸裏にある玉田艶子は、中村のいう「あたま」の女性ではある。しかし、ともあれ、健次も伊能とともに、独力で、——健次の胸中にある女性は、「あたま」の女性とは思われない——その知性によって、道を拓こうとしていないことだけは、確かである。

自分自身との調和が、自分の考へで自分をもっとも高く価値し得ることが幸福の最後の条件です。(前掲中村言)

「自分自身との調和」という点で、石坂『何処へ』の主人公伊能も、不十分であったということができよう。しかし、伊能は健次よりも、「あたま」の女のもとに行こうというのだから、その部分が戦後の書き足しの部分ではあっても、本当の知性の持主に近づいていっているといっただけかと思う。その意味で、白鳥に『何処へ』の未完の部分を書き足して貰っていたら、なおよかったのという、今は叶わない希望を述べたところだ。

ともあれ、白鳥『何処へ』も、石坂『何処へ』も、ともに、明治末期、昭和一〇年前後という、近代日本における重要な時代の知識人のなかの、知性の本態を解明した作品として、ともに高く評価されてよからうと思う。したがって、白鳥『何処へ』は戯作どころではなく、また石坂『何処へ』も、自ら「戯作」とは称しても、それはあくまで謙譲の語であつたとうけとるべきで、つまりは両作ともに本格的な文学作品であつたといつていいものであつたと結論したいのである。

そのような人間像を形象化し得たことは、正宗白鳥も、石坂洋次郎も、本当の意味の良識の人であつたという結論を出しても、それは短絡的見解とはいえないと思うのであるがどうかであろうか。

(この一文は、評論として草したものである。)

原稿受理 一九八〇年四月二日



Summary

Concerning Two Books: *Izuko e (Where To?)*  
by Masamune Hakuchō and Ishizaka Yōjirō

Saburō Tsujihashi

The two volumes entitled *Where To?* by Hakuchō and Ishizaka embody the Changes in the image of the intellectual from the end of the Meiji Period to the teens of the Showa era. For this reason these books should have been highly valued as works elucidating the life of the intellectual in Modern Japan. One should say that both men, in describing humanity in concrete form, have shown themselves to be men of sensibility.